WEB㉑～㉕

1.		一般の生活者にとって、かぜとインフルエンザとの識別は必ずしも容易ではないため、インフルエンザの流行期には、本剤のように解熱鎮痛成分がアセトアミノフェンのみからなる製品の選択を提案すること等の対応を図ることが重要である。
2.		トラネキサム酸は、血液を凝固しにくくさせる作用があり、血液凝固異常のある人では、出血傾向を悪化させるおそれがある。
3.		アスピリンは、ピリン系と呼ばれる解熱鎮痛成分であり、ショック等の重篤な副作用のほか、ピリン疹とよばれる薬疹が現れることがある。
4.		アセトアミノフェンは他の解熱鎮痛成分のような胃腸障害は少なく、空腹時に服用できる製品もある。
5.		月経前症候群は、月経の約 10～３日前に現れ、一般的には月経終了と共に消失する腹部膨満感、頭痛、乳房痛などの身体症状や感情の不安定、抑うつなどの精神症状を主体とするものをいう。
6.		血の道症は、月経、妊娠などの生理現象や、流産、人工妊娠中絶などを原因とする異常生理によって起こるとされ、範囲が更年期障害よりも広く、年齢的に必ずしも更年期に限らない。
7.		一般的に、点眼薬の１滴の薬液量は、結膜嚢の容積より少ない。
8.		かぜの約８割はウイルス（ライノウイルス、コロナウイルス、アデノウイルスなど）の感染が原因である。
9.		かぜ薬は、ウイルスの増殖を抑えたり、ウイルスを体内から除去するものである。
10.		エテンザミドは、痛みの発生を抑える働きが作用の中心となっている他の解熱鎮痛成分に比べ、痛みが神経を伝わっていくのを抑える働きが強い。
11.		眠気防止薬は、一時的に精神的な集中を必要とするときに、眠気や倦怠感を除去する目的で使用されるものであり、小児用としても認められている一般用医薬品がある。
12.		デキサメタゾンは、ステロイド骨格を持つ化合物が人工的に合成され、抗炎症成分として用いられるステロイド性抗炎症成分である。
13.		オキシドール（過酸化水素水）は、組織への浸透性が低く、刺激性がない。
14.		低密度リポタンパク質（ＬＤＬ）は、末梢組織のコレステロールを取り込んで肝臓へと運ぶ働きがある。
15.		ジフェニドール塩酸塩は、内耳にある前庭と脳を結ぶ神経の調節作用のほか、内耳への血流を改善する作用を示す。
16.		人工涙液は、涙液成分を補うことを目的とするもので、目の疲れやコンタクトレンズ装着時の不快感等には用いられない。
17.		ベンザルコニウム塩化物は、黄色ブドウ球菌、溶血性連鎖球菌又はカンジダ等の真菌類に対する殺菌消毒作用を示す。
18.		ナファゾリン塩酸塩が配合された点鼻薬は、過度に使用されると鼻粘膜の血管が反応しなくなり、逆に血管が拡張して二次充血を招き、鼻づまりがひどくなりやすい。
19.		鉄欠乏性貧血を予防するため、貧血の症状がみられる以前から予防的に鉄製剤を使用することが適当である。
20.		制酸成分を主体とする胃腸薬は、酸度の高い食品と一緒に使用すると胃酸に対する中和作用が低下することが考えられるため、炭酸飲料等での服用は適当でない。
21.		ビタミンＥ主薬製剤は、骨歯の発育不良、くる病の予防に用いられる。
22.		ビサコジルは、直腸内で徐々に分解して炭酸ガスの微細な気泡を発生することで直腸を刺激する作用を期待して用いられる。
23.		ブロモバレリル尿素、アリルイソプロピルアセチル尿素は、いずれも依存性がある成分であることに留意する必要がある。
24.		タウリンは、肝臓機能を改善する働きがあるとされる。
25.		副交感神経系を刺激して鼻粘膜を通っている血管を収縮させることにより、鼻粘膜の充血や腫れを和らげることを目的としてナファゾリン塩酸塩が配合されている。
26.		駆虫薬は、腸管内に生息する虫体のほか、虫卵にも作用する。
27.		カフェインの血中濃度が最高血中濃度の半分に低減するのに要する時間は、通常の成人が約３．５時間であるのに対して、乳児では約８０時間と非常に長い。
28.		パモ酸ピルビニウムは、蟯虫の呼吸や栄養分の代謝を抑えて殺虫作用を示すとされている。
29.		駆虫薬は、腸管内の寄生虫を駆除するために用いられ、一般用医薬品の駆虫薬が対象とする寄生虫は、条虫と蟯虫である。
30.		３歳未満では、乗物酔いが起こることはほとんどないとされており、３歳未満を対象とした乗物酔い防止薬はない。
31.		オウバク、ゲンチアナ及びユウタン等の生薬成分が配合された健胃薬は、苦味の強い製剤が多いため、一般の生活者に対してはオブラートで包む等、味を遮蔽する方法で服用するよう指導することが望ましい。

32.		酸性消毒薬が目に入った場合は、アルカリで中和するとよい。
33.		蚊（アカイエカ、シナハマダラカ等）は、吸血によって皮膚に発疹や痒みを引き起こすほか、日本脳炎、マラリア、黄熱、デング熱等の重篤な病気を媒介する。
34.		咀嚼剤は、口腔内が酸性になるとニコチンの吸収が促進されるため、炭酸飲料を摂取した後はしばらく使用を避ける。
35.		グリチルリチン酸二カリウムは抗炎症作用により、皮膚や鼻粘膜の炎症を和らげる作用を示す
36.		身体的な問題がなく生じる夜泣き、ひきつけ、疳の虫等の症状が、成長に伴って自然に改善することはまれである。
37.		小児鎮静薬は、症状の原因となる体質の改善を主眼としているものが多く、比較的長期間（1ヶ月位）継続して服用されることがある。
38.		デキストロメトルファン臭化水素酸塩水和物は、麻薬性鎮咳成分とも呼ばれ、長期連用や大量摂取によって倦怠感や虚脱感、多幸感等が現れることがあり、薬物依存につながるおそれがある。
39.		鉄製剤の服用の前後 30 分にアルミニウムを含む製剤を摂取すると、アルミニウムと反応して鉄の吸収が悪くなることがある。
40.		グアイフェネシンは、気道粘膜からの粘液の分泌を促進する作用を示す。
41.		ヒマシ油は、主に誤食・誤飲等による中毒の場合などに用いられ、防虫剤や殺鼠剤を誤って飲み込んだ場合にも使用することができる。
42.		ゴキブリは、日本紅斑熱や発疹チフス等の病原細菌であるリケッチアを媒介する。
43.		トリメトキノール塩酸塩水和物は、交感神経系を刺激することで気管支を拡張させ、咳や喘息の症状を鎮めることを目的として用いられる。
44.		オキセサゼインは、局所麻酔作用のほか、胃液分泌を抑える作用もあるとされ、胃腸鎮痛鎮痙薬と制酸薬の両方の目的で使用される。
45.		尿糖・尿タンパク同時検査の場合、早朝尿（起床直後の尿）を検体とするが、尿糖が検出された場合には、食後の尿について改めて検査して判断する必要がある。
46.		漢方処方製剤のうち、用法用量において適用年齢の下限が設けられていないものは、生後1ヶ月から使用できる。
47.		浣腸薬は、繰り返し使用することで直腸の感受性が高まり、効果が強くなる。
48.		コレステロールは水に溶けにくい物質であるため、血液中では血漿タンパク質と結合したリポタンパク質となって存在する。
49.		裂肛は、肛門内部に存在する肛門腺窩と呼ばれる小さなくぼみに糞便の滓が溜まって炎症・化膿を生じた状態である。
50.		パパベリン塩酸塩は、消化管の平滑筋に直接働いて胃腸の痙攣を鎮める作用を示す。

3章　○×-5　こたえ

番号	解答	解説（×のみ）
1	○	
2	×	トラネキサム酸は、「凝固した血液を溶解されにくくする働きがある」ため、血栓のある人や血栓を起こすおそれのある人が使用すると悪化するおそれがある。
3	×	アスピリンではなく、「イソプロピルアンチピリン」。アスピリンは、サリチル酸系解熱鎮痛成分。
4	○	
5	×	月経「終了」と共に消失するのではなく、月経「開始」と共に消失する。
6	○	
7	×	１滴の薬液量は約５０μＬであるのに対して、結膜嚢の容積は３０μＬ程度。点眼薬の１滴の薬液量は、結膜嚢の容積より「多い」。
8	○	
9	×	かぜ薬は、ウイルスの増殖を抑えたり、ウイルスを体内から「除去するものではない」。
10	○	
11	×	成長期の小児の発育には睡眠が重要であることから、小児用の眠気防止薬は「ない」。
12	○	
13	×	刺激性がないのではなく、刺激性が「ある」。
14	×	低密度リポタンパク質（ＬＤＬ）は、コレステロールを「肝臓から末梢組織」へと運ぶ。
15	○	
16	×	目の疲れや乾き、コンタクトレンズ装着時の不快感等にも「用いられる」。
17	○	
18	○	
19	×	貧血の症状がみられる以前から予防的に貧血用薬を使用することは適当ではない。
20	○	
21	×	ビタミンＥではなく、「ビタミンＤ」
22	×	ビサコジルではなく、「炭酸水素ナトリウム」
23	○	
24	○	
25	×	副交感神経系ではなく、「交感神経系」
26	×	虫卵には作用しない
27	○	
28	○	
29	×	条虫と蟯虫ではなく、「回虫と蟯虫」。
30	○	
31	×	散剤をオブラートで包む等、味や香りを遮蔽する方法で服用されると「効果が期待できず、そのような服用の仕方は適当でない」。
32	×	酸をアルカリで中和したり、アルカリを酸で中和するといった処置は、熱を発生して刺激をかえって強め、状態が悪化するおそれがあるため適切ではない。早期に十分な水洗がされることが重要である。
33	○	
34	×	促進ではなく、「低下」
35	○	
36	×	成長に伴って自然に治まるのが通常である。
37	○	
38	×	デキストロメトルファン臭化水素酸塩水和物は、「非麻薬性」。なお、指定濫用防止医薬品として指定されている。
39	×	アルミニウムではなく、「タンニン酸」
40	○	
41	×	防虫剤や殺鼠剤のような「脂溶性」の物質の誤飲による中毒には、ヒマシ油を使用してはならない。
42	×	ゴキブリではなく、「シラミ」。ゴキブリは、食品にサルモネラ菌、ブドウ球菌、腸炎ビブリオ菌、ボツリヌス菌、Ｏ－１５７大腸菌等を媒介する。
43	○	

44	○	
45	○	
46	×	漢方処方製剤のうち、適用年齢の下限が設けられていないものは、生後３ヶ月未満の乳児には使用しないこととされている。
47	×	感受性が高まるのではなく、「低下」（いわゆる慣れ）が生じて効果が弱くなる。
48	○	
49	×	裂肛ではなく、「痔瘻」
50	○	